大阪市立大学大学院　都市系専攻
修士論文概要集 2015 年 2 月

雑誌『新住宅』の概要と特徴

―戦後における住宅思潮の研究―

On Outline and Characteristics of the magazine “Shin-Jutaku”

-A Study on Thinking on Housing after World War Ⅱ-

建築デザイン分野　　前田憲泰

雑誌『新住宅』の概要を捉え、誌上で展開された住宅思潮を考察することで、その特徴が明らかとなった。同誌は創刊時より一貫して建築の専門家よりもむしろ素人に向けて住宅の基礎的知識の普及を行った。そして一般大衆の住意識の向上に努めることで、日本の住宅界の水準の底上げに貢献した。また人々の住宅に対する理解を深め、最終的にそれぞれが自らの意思や権利のもとに住まいを選択させる手引きとなることで、戦後の民主主義時代を象徴する“新住宅”を実現させた。

The characteristics of the magazine “Shin-Juataku” were revealed, by capturing the outline of the magazine, and considering thinking on housing deployed in a magazine. Basic knowledge of housing had been taught the amateur rather than the architectural expert in the magazine since its first issue. The magazine affected consciousness on housing of people, it was contributed to the level of bottom-up of Japanese housing. And it was realized “new house” :the symbol of the post-war democracy era, to supply people with knowledge of housing and be chosen residence for living to people with own intention and rights.

1.はじめに

1-1 背景と目的

日本においてこれまで刊行されてきた建築雑誌は多岐に渡り、『建築雑誌』(日本建築学会)や『建築と社会』(日本建築協会)といった学術的に権威ある雑誌や、『新建築』(新建築社)といった格式ある雑誌は建築界と歩みを共にしてきた長命の雑誌である。また『建築新潮』や『国際建築』(旧国際建築時論)、『建築紀元』などといった建築雑誌は、モダニズムや合理性や機能性を兼ね備えたインターナショナル建築の普及を主張し、建築界の発展に大きく影響を与えてきたことは周知の事実である。このように建築雑誌と建築界の発展は密接な関係にあると言え、それらを体系化することは当時の建築界の実際的動向を把握するために重要な意義を有するものであるといえる。

1946 年から 1988 年まで新住宅社から刊行されていた住宅雑誌『新住宅』は、戦後間もなく大阪で創刊された雑誌である。編集発行人は創刊から廃刊まで一貫して小林清(1908-?)によって務められた、他誌に類を見ない雑誌である。また日本住宅史の激動期に刊行されていた有数の住宅専門雑誌として、大きな影響力を持っていた雑誌であったと考えられる。小林は 1973 年建設大臣賞、1983 年黄綬褒賞を受賞しており、これは小林とその代表的業績である『新住宅』が建築界に貢献したことを示唆している。しかしこれまでに『新住宅』がどのような性格の建築雑誌であったかを指摘する先行研究はほとんど存在していない。そこで本研究では、『新住宅』の概要をまとめ、その特徴を明らかにすることを目的とする。

1-2 研究の位置づけ

『新住宅』を用いた研究として岡本,澤谷,住田(1996)の『雑誌「新住宅」掲載の戸建住宅の傾向分析』が存在する。当研究は『新住宅』に掲載された住宅作品から平面型の変遷や傾向を統計的に分析するものであり、総じて規模が大きく、日本の伝統に囚われないデザインの注文住宅が多いこと、また徐々に新しい建築材料や新工法による個性的な住宅が増えていく傾向にあると結論づけている。つまり実際的な世間の戸建住宅と遊離性があることを指摘するものであるといえる。よって当研究は『新住宅』自身の特徴について言及することを目的としたものではな

いが、導出した結論は同誌の一特徴を捉えている点において有益な先行研究であるといえる。これに対して本研究では『新住宅』の掲載論考を中心に考察し、その特徴を明らかにするといった方法をとる。よって当既往研究とは視座が異なっているので新規性があるといえる。

2.編集発行人・小林清

本章では編集発行人を務めていた小林清の活動経歴に注目し、その人物像や思想についての考察を行う。

2-1 設計者としての活動

小林は 1932 年より日本最初期の住宅供給会社[1]であるあめりか屋の設計技師として住宅の設計活動を開始した。同社の創設社である元店主・橋口信助は住宅改良会の会主も務め、日本の在来住宅を洋風化に改良することを主張する人物であった。そのためあめりか屋にもそういった企業理念があったので、小林もその影響を受けていると考えられる。小林の設計作〈長野邸〉[2]では、実際に広縁を板間とすることで洋風化を図っていることが確認される。しかし、広縁は襖を開けると隣室の和室と一体の空間として利用することが可能となっており、新たな生活様式と過去からの慣習を共存させることで新旧の調和を図るような設計手法をとっている。こういった手法は当時のあめりか屋設計の『新住宅』掲載作品には見られない手法であり、〈長野邸〉にみられる過去からの慣習と調和させようとする姿勢は、小林独自の手法であると考えられる。そのように在来住宅の洋風化への改良を行いつつも、小林の伝統主義的な思想が現れているといえる。

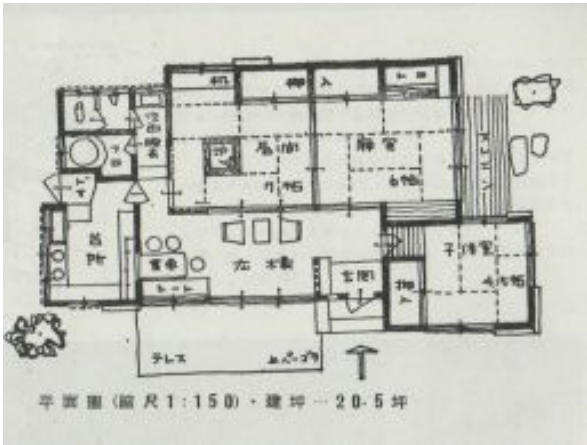


図 1 〈長野邸〉平面図

2-2 編集者としての活動

小林は 1933 年から住宅改良会の機関誌として発行されていた雑誌『住宅』(1916-1944)に編集者として携わった。同誌は当初、在来住宅改良の啓蒙を行う内容のものであったが、小林が編集に関わり始めた時期は編集発行人が橋口信助から山本拙郎、山本から本間乙彦へと変わった時期である。同時期は本間による編集方針の改革が行われ、同誌は当初の啓蒙主義的な立場から一般的住宅誌としての性格を強めていきはじめた時期であった[3]。小林は[表 1]のように多くの論考を寄せているが、その中でも同誌で初めて携わった連載である「美しき民家」という名の日本民家採集の連載に時間的にも労力的にも最も深く関わっていたといえる。その経験によって小林は日本の気候や風土のもとに根付いた民家に関する見識を深めた。よって『住宅』誌上での小林の活動は、本誌創刊の契機である西洋住宅への関心よりも、日本の気候風土に強く関わり合いを持つ住宅である民家を通して、住宅と気候風土の関係の重要性に気づかされた、地域主義的な思想を形成した時期であったといえる。

年月（号）	「記事名」　　‘(　)’内は共著の人物
昭和7年12月	「書斎の計画について」
昭和8年6月	「審査會經過報告」
昭和9年1月	「装飾の要素（此から家を建てる人のために）」
昭和9年3月	「封川居拾遺集　雪の日、タウト教授と封川居を訪れる。」
昭和9年4月	「２４６通の中から入賞が決定される迄」
昭和9年11月	「大風水害畫報」
昭和10年1月	「西双ヶ丘住宅展覧會開會式」
昭和10年7月	「初芝住宅展の記」
昭和10年7月	「第一次審査會經過報告」
昭和10年7月～	「編集日記」
昭和10年8月	「第2次審査會經過報告」
昭和10年9月	「門と塀を見て歩く」
昭和10年10月～	「美しき民家」（本間乙彦）
昭和10年12月	「十津川を探る」（本間乙彦）
昭和11年1月	「十津川を探る2」（本間乙彦）
昭和11年1月～	「土佐堀河畔抄」
昭和11年2月	「門と塀」
昭和11年7月	「越飛秘境・有峰入りの記」
昭和11年8月	「越飛秘境・有峰から高原峡へ」（本間乙彦）
昭和11年10月	「大野川鮎狩の記」（西村辰次郎）
昭和12年4月	「中流住宅懸賞圖案・審査會の記」
昭和12年5月	「椿咲く大島へ」
昭和13年3月～	「住宅講座・家の建つまで」
昭和13年5月～	「新住宅巡り」
昭和13年10月	「防護室を持つ小住宅圖案とその防空計畫案・審査會の記」
昭和14年2月～	「住宅設計資料」
昭和14年11月～	「編輯後記」
昭和15年9月	「理想郷「黒澤村」を訪ねる記」
昭和15年10月～	「美しき民家」（廣瀬初夫）
昭和16年8月	「此花住宅を見る記」
昭和16年2月	「門」

表 1　『住宅』掲載の小林清による記事

2-3 その他の活動

小林は日本建築協会の理事を 18 年、大阪府建築士会の理事を 12 年務めており、住宅会のみならず建築界の中央にも身を置き、その発展の一躍を担っていたことがわかった。また 1941 年から 1944 年にかけて大阪で開講されていた建築工芸技術研究所婦人建築研究部や、財団法人日本建築文化事業協会(日本建

築文化事業協会所属団体)の通信教育講座で教育指導を行っていたことがわかった。前者では、戦時下に男性建築技術者が戦地に召集されていったことから、婦人にも建築技術を習得させようという概念のもとに活動をしていた団体であり、何か特定のデザイン理念などを啓蒙しようとするものではなく、純粋に婦人技術者を養成しようとする団体であった。また、後者では具体的な活動年は不明であるが、『新住宅』1975 年 2 月号にて紹介されている講義内容からは、日本にはなぜ木造が発達したのかといったことを地域主義的な視点から解説するものであり、ここでも住宅の基礎的知識の指導を行っていたことがわかった。このように先導的立場にあっては、特定のイデオロギーやデザインを啓蒙するのではなく、偏りのない住宅の基礎的知識や技術の指導に努めていたといえる。

3.『新住宅』の概要と特徴

3-1 創刊経緯

『新住宅』は 1946 年 9 月に創刊され、1988 年 4 月をもって廃刊にいたった月刊誌である。1946 年 9 月の創刊号では、雑誌創刊の経緯を次のように述べられている。

新日本の建設、なかんずく都市の復興の先驅は何を措いても、住宅の建設にまたねばならぬと想ひ、その機運みなぎらせ、建設にあたりてはよりよき示唆を與へ、且將來営まるべき民主主義社會に於ける適切なる住生活の指導をなすの必要を痛感、永年、苦楽を俱にして來た住宅雑誌の愛着たちきれず、その復活を企画、ここに本誌を刊行するに致した次第である。[4]　（以下略。「／」は改行）

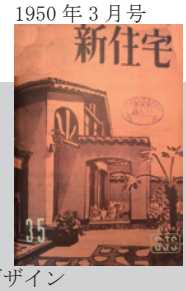
敗戦直後にあった日本の都市は、被災のためにほぼ壊滅状態にあった。また、世間では民主主義の強化が謳われていた。そんな時代背景のもとに、小林は、まず都市の復興のためには住宅の建設が第一に行われるべきであると考え、戦前に不況の煽りを喰らって突如廃刊に至った『住宅』の復活によって、住宅建設の推進を企てたといえる。また、新しい民主主義時代には新しい住宅が必要であると考え、その命題を『新住宅』としたことのである。そして同誌の創刊目的を、これから進む戦災復興の住宅建設の適切な指導を果たすための雑誌を目指していたのである。

3-2 概要

創刊から廃刊までに刊行された総巻数は 491 巻である。雑誌の大きさは全誌 B5 版で、頁数は創刊時 32 頁であったが、年々頁数は増加傾向にあり、廃刊

	体裁・主な出来事	頁数	表紙デザイン
1946	創刊（9 月）	32	廣瀬初夫によるデザイン
1950		36～40	写真を用いた図案
		48～50	
1958	図譜欄と記事欄の線引きがなくなる（1 月）	80～94	
1960			
1970		98～104	
1972	最高頁数（8 月）	(136)	
1980			
1986	副題がつけられる（9 月）	100～116	
1988	廃刊（4 月）		

1946 年 9 月号


1950 年 3 月号

1950 年 4 月号

廣瀬初夫によるデザイン　写真に変更

1950 年 7 月号

1967 年 1 月号

1970 年 1 月号

1972 年 1 月号

特集名が記載　図案変更　図案変更　図案変更

1980 年 10 月号

1984 年 2 月号

1985 年 1 月号

1986 年 9 月号

図案変更　図案変更　図案変更　副題，初マンション写真

表 2　『新住宅』外面的要素の変遷

時には 100 頁を越える。また創刊当初は住宅作品紹介を行う「住宅図譜欄」と、論考を中心とした「記事欄」の二部構成であったが、1958 年 1 月号をもって両者の線引きがなくなっている。

表紙デザインは竹中工務店設計技師である廣瀬初夫によるものであり、建築の図面やスケッチによる図案であった。しかし 1950 年 4 月号を境に建築写真が表紙に用いられるようになったため、廣瀬による表紙デザインはそれ以前までであると考えられる。

また末期にあたる 1986 年 9 月号からは『housing and mansion・clinic・restaurant・sukiya・etc』といった副題がつけられ、住宅のみならずマンションを扱っていることが強調されている。

その他の表紙の図案変更等を含め、外面的要素の変遷を[表 2]に示す。

3-3 読者層

1)創刊当初

『新住宅』創刊時は、敗戦直後の時期であったため建築界全体の風潮として、住宅の大量供給や都市の不燃化といった、今後の展望や構想に対する議論が集中的に行われていた。『新住宅』誌上でも同様の議論は多くなされている。しかし、その中でも前野慶太郎「バラックの手引き」といった被災で住宅を失った人々に対しての応急処置的な住宅建設の方法の紹介や、南部正太郎「漫書・新生活の設計」のように当時の耐乏生活を風刺的に漫画で描きながら生活の工夫術を普及するといった、建築の素人に向けた記事を掲載している。また、当時不燃建築の研究に尽力していた田邊平学は、専門用語や数値によって具体的に実験データを開設する研究報告は他誌で行い、『新住宅』誌上ではその優位性と普及の啓蒙だけを行うといった立場を取っており、専門家でなくても読めるような内容にとどめている姿勢であるといえる。

2)1950 年代以降

1950 年 1 月号ではハガキ問答「これから家を建てる人の為に」という名の、建築の専門家や著名人から施主に向けてアドバイスを与える内容の記事が掲載されている。当記事内では不燃住宅の建設や、椅子座式生活を推奨するものなど様々な回答が掲載されている。その中でも住宅設計は建築家に任せるべきであるといった主旨の回答も多く存在しており、これが建築の素人に向けた記事であることは明らかと言える。

同記事は『新住宅』が廃刊に至るまで数回に渡って企画掲載されている。このように直接的に一般大衆に向けて助言を与える記事は他誌にはみられないものであり、『新住宅』の独自性を顕著に表すものである。つまり『新住宅』は創刊から廃刊に至るまで一貫して建築の専門家のみならず、素人も含めた一般大衆に読まれるような雑誌の立場をとっていたということがわかる。

4.『新住宅』の編集方針

ここでは『新住宅』の論考の考察を行うことで、同誌上で展開された住宅思潮を捉え、そこから同誌の編集方針の変遷を明らかにすることを目的としている。

4-1 論考の傾向

まず始めに、創刊から廃刊までの論考数の推移の調査を行った。

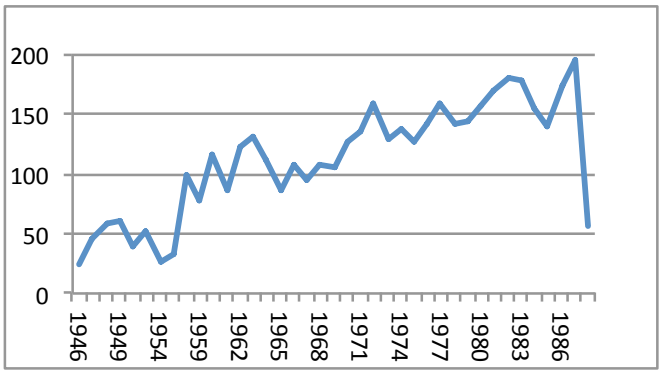


表 3　論考数の推移

先述のように、『新住宅』は年々頁数が増加していることもあり、それに伴って論考数も基本的には右肩上がりになっている傾向が認められる。しかし、1950 年代中期や 1960 年代中期にかけては論考数が減少傾向にあることが確認できる。

次にこれら全論考の執筆者を書き出し、リスト化を行うと共に、可能な限り各人物の職種の調査を行った。そこから、それらの職業を以下の 6 種類に分類したのち、全年の割合の推移を割り出した。その結果を[表 4]に示す。

【凡例に関して】①教員・研究者／大学教員、短期大学教員、工業学校教官など②建築士／建築家、組織設計勤務、ゼネコン勤務など③営繕／建設省、地方建設局など④企業・メーカー／建材及び設備会社勤務、家電メーカー勤務など⑤造園・園芸／造園家、作庭家、園芸会社勤務など⑥その他／建築を専門としない職業全般(職業不明も含む)

『新住宅』の論考著者としては〈教員・研究者〉または〈建築士〉が過半数を占めていることがわかる。しかし、1950 年代中期と 1960 代中期には過半数を割っている年も確認でき、ここで特質が見られる年は先に見た論考数が減少傾向にある箇所と重なることが指摘できる。また創刊当初は営繕の割合が高いが、年々その割合が減少傾向にあるといったことを指摘できる。

4-2 論考内容について

ここでは『新住宅』の論考内容の分析を行う。本研究では同誌の論考の内容から、編集方針の変遷が全部で５つの時期に分割できることを明らかにした。以下にそれぞれの時期に分割し、解説して行く。

■第一期：1946 年～1949 年

『新住宅』が創刊されたこの時期は敗戦直後にあたり、当時は住宅界のみならず建築界全体の風潮として住宅の大量供給や都市の不燃化といったことに焦点が当てられていたことは先に述べた。この第一期には『新住宅』誌上でもこういった議論が中心として展開されている時期である。平山嵩[5]や早川文夫[6]のように都市部においては今後アパート建築を建設すべきであると言った意見のように戸建住宅を良しとしないものや、小倉強[7]のように小住宅は時勢を反映するものであるが、早急に脱却すべきであるといった意見のように、当時建設されていた小住宅に関する否定的見解も存在する。このように戸建住宅よりもアパートや都市的なスケールの言及も多く、都市部が消失したという時代背景もあって、住宅専門誌としてのアイデンティティには欠乏しているといえる。

しかしその一方で、菊池重郎[8]は当時の建築雑誌は、学生や実務家からすれば有用なものであるが、実際の国民の生活から遊離したものであることを指摘し、『新住宅』が国民全体に住宅建設技術を普及する役割を果たし、早急に住宅の建設が進められるよう努めるべきであると述べている。実際に『新住宅』では長尾勝馬による住宅建設の工程に従って解説を行う「素人のために-これから家を建てる人の為に-」を連載しており、住宅建設の基礎的知識の普及を行っている。このように第一期では今後の住宅のあり方を模索しながらも、住宅の基礎的知識の啓蒙を行っていた時期であったといえる。

■第二期：1950 年～1957 年

1950 年は住宅金融公庫が開設された初年度であり、これまでのバラック的な住宅から本格的な住宅復興へと移行する兆しの見えた年であったといえる。『新住宅』では同年の 7 月号から初めて特集が組まれるようになり、7 月号は「台所の研究」、8 月号は「涼しく住む工夫」といったように、徐々に住宅界全体に関しての議論から、具体的な生活の場へとその議題の中心を変えていった。

また、小住宅に関する特集も頻繁に組まれるようになり、これまでの都市的なスケールから戸建住宅を中心に扱う雑誌としての性格を明確にした時期でもある。記事欄では、住宅金融公庫開設により実作が増えた影響もあってのことと考えられるが、小住宅の平面図の掲載と解説が行われるようになった。しかし、記事欄に掲載された作品には良作のみならず反面教師的に紹介されているものもあり、その背景には住宅復興が盛んになると予想される時代背景にあったため、これから住宅を建設する人の為の資料として利用されることを目的としたものであると考えられる。

また 1954 年からの記事欄では、特集内容に応じて、インテリアや住宅設備など、様々な実例写真を網羅的に掲載し、デザインカタログのような体裁を基調としている。そのため論考数が減少傾向にあることが指摘できる。こういった記事も、先述の記事欄掲載の小住宅図面などと同様、これから住宅を建設する人の為に資料的な利用のされ方を想定していると考えられる。

このように第二期では次第に住宅復興が進み出した時勢に伴って、住宅建設の資料集成的な役割を果たすような編集方針を取っていたといえる。

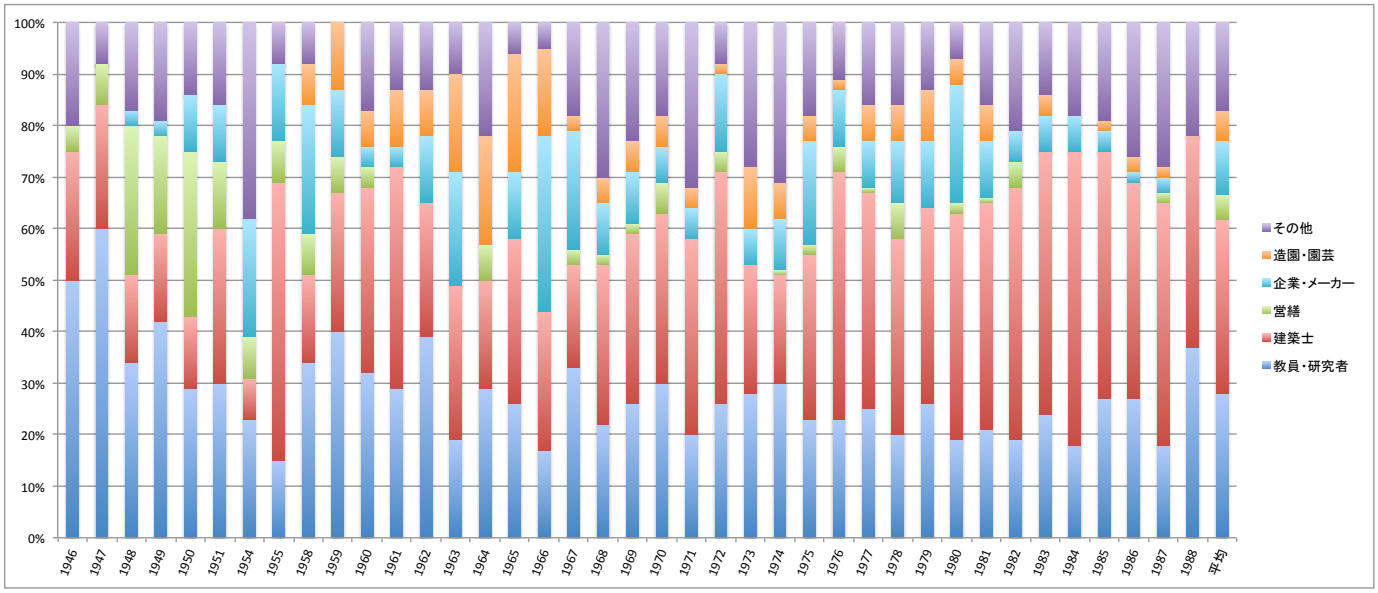


表 4　各年論考著者の職種の推移

■第三期：1958 年～1968 年

この時期の論考は、創刊時より続く川島宙次や岡田孝男による日本の伝統的な建築を紹介する連載の他に、執筆者不定の「すまい随想」、「社会の窓」といった随筆調の記事と、上林博雄「すまいと機械設備」、長尾勝馬「house doctor」といった住生活の知恵を普及する記事の計 6 本を基本に雑誌が構成されている。これまでのように特集に応じた論考がほとんど掲載されなくなったことが論考減少の要因であると指摘できる。それに反して、毎号あたりの作品紹介数はこれまでより増加しており、第三期は住宅建設の興隆期として作品紹介を中心とした編集方針であるといえる。

■第四期：1969 年～1979 年

この時期には改めて論考数が増加し始め、様々な議論が展開される。三村裕史[9]と植田一豊[10]によるセカンドハウス論や、三川栄吉[11]と水野靖子[12]のプレハブ住宅論など、誌上では対立する意見が多く確認される。それらの論争の裏には水野や浅井謙[13]が指摘する「国民の住意識の低さ」の改善にあると考えられる。

両者は住宅の建設は進んだのにも関わらず、住生活は一向に改善されないのは住意識の低さのせいであり、住宅の質の底上げには住意識を高める必要があるとしている。浅井はそのためには本物志向になる必要があるとし、根津耕一郎[14]は住宅の価値を精神的充足度に求めるべきであると主張している。

それらの他にも、この時期には住宅の本質を再考すべきだとする主旨の論考が多い傾向が特徴として挙げられ、住意識の改善を啓蒙していた時期にあるといえる。

■第五期：1980 年～1988 年

1980 年以降はプレハブやマンションといった、所謂“買う住宅”に関する論考が多い傾向にあるといえる。その背景にはハウス 55 計画(1975 年)によりプレハブが安価になり、なおかつ質が向上したことで需要が高まったことや、国民がかつて資産的価値の高さから戸建の持家住宅に憧れを抱いていたが、次第にマンションにも資産的価値を見出し始めたという風潮にあったことから、同誌上でも“建てる住宅”より“買う住宅”に議論の場を移行していったと考えられる。しかし論考では必ずしも“買う住宅”を肯定的に捉える意見だけではなく、懐疑的な立場の意見を持つもの者も多く、明確に両者の優劣を付けることは避けている姿勢にある。

これは、将来住まう住宅を選択する人々に対して、自らが慎重に検討を行い、最善の選択肢を見つけるために指導を行っていた時期であったといえるだろう。

5.結論

雑誌『新住宅』の概要をとらえることで、同誌の特徴とその変遷が明らかとなった。

第一期には戦後の新しい住宅のあり方を模索しながらも、素人のために住宅建設の知識の指導を行っていた。第二期ではこれから住宅を建設する人のために様々な平面型やデザインを提示し、カタログのような編集方針をとっていた。第三期には作品紹介を主とし、一般的住宅雑誌のような性格を強めるが、第四期、第五期では多様化していく住生活に対して、読者にも住宅のあり方を考えさせることで、世間の住意識向上の啓蒙を行った。

このように『新住宅』は総じて、建築を専門としている人々よりもむしろ、建築を専門外とする一般大衆に向けて、住意識向上の啓蒙に努めたといえる。その普及活動は、特定のイデオロギーやデザイン思想を啓蒙するのではなく、偏見のない住宅に関する知識の理解を深めることに趣旨があり、それは一貫して編集発行人を務めた小林清が人々の生活に寄りそい、偏りのない住宅思想を持つ人物であったからこその編集方針であったと言えるだろう。このように専門家のみならず一般大衆に向けた住宅に関する指導を行うことで住意識の向上を啓蒙し、日本の住宅界全体の水準の底上げに貢献したことが本誌の独自性であるといえる。

また、一貫して住宅に関する指導を行いながらも特定の概念を明示することはなく、最終的な自らの住生活のあり方を読者それぞれの意思に完全に委ねている。それは『新住宅』が創刊時に謳った新しい住宅とは、戦後の民主主義時代を象徴するものであり、住民の意思や権利を反映したそれぞれの住まいこそが“新住宅”であると考えたためであろう。

---

[1] あめりか屋は現在、住宅の設計・施工を専門に行っているが、同社は創設当初アメリカのコテージやバンガローの輸入販売から業務を開始している。ここではそういった業務変遷を内包した上で住宅供給会社と定義している。

[2]『新住宅』1951 年 2 月号掲載

[3] 菊岡倶也・藤井肇男編『日本近代建築・土木・都市・住宅　雑誌目次総覧〈第 I 期〉第 6 巻』(1990) 柏書房株式会社

[4] 小林清「創刊の辞にかえて」『新住宅』1946 年 9 月号

[5] 「今後の住宅建設に対する構想」『新住宅』1946 年 11+12 月号

[6] 「今年の住宅」『新住宅』1947 年 5+6 月号

[7] 「へや」『新住宅』1946 年 10 月号

[8] 「国民生活のあり方と工場生産のあり方」『新住宅』1948 年 8 月号

[9] 「将来における住宅像の意味」『新住宅』1969 年 1 月号

[10] 「明日への住宅雑感」『新住宅』1969 年 7 月号

[11] 「住宅の現状と傾向」『新住宅』1975 年 7 月号

[12] 「最近の住まいの傾向」『新住宅』1975 年 7 月号

[13] 「最近の小住宅の傾向」『新住宅』1975 年 7 月号

[14] 「安くて住みよい家」『新住宅』1976 年 7 月号

討議

討議［　徳尾野准教授　］

とてもよく調べられているとは思うんですけども、ひとつ大きな疑問があって、副題に住宅思潮という言葉があって、論考を中心に分析を進められているのですが、こういった建築の雑誌というのは、やはりそれに対して実例が対応してくると思います。でも実例は小林自身の初期の住宅の分析がありましたが、『新住宅』になってからの 40 年の間の実例にほとんど触れられてないことに関して、それは何か意図があったのか、説明をお願いします。

回答

『新住宅』の雑誌自身の特徴を指摘する先行研究がほとんどないと言いましたが、掲載住宅の平面の変遷を扱うという先行研究があって、それに対して自分は雑誌自身の特徴を明らかにするために、論考を通してどういった思潮が雑誌上で展開されているかといった所に注目して研究を行いました。そのため作品はあまり取り上げずに研究を進めました。

討議［　徳尾野准教授　］

この既往研究の中で、扱っている住宅の延床面積が平均より大きいとか小さいとかそういう話ですね。住宅の住思想みたいなこと、特に特集に対応する作品っていうもの恐らく面積の大小ではなくて、そこでの生活の仕方だとか、建てるか買うか、例えばプレハブの問題とか、多分色んなことを扱っていると思うんです。多分『新建築』みたいに専門家を対象とした雑誌とは違う住宅作品が載っていて、先行研究に丸投げではなくて、論考を中心でもいいのですが、住宅の実例がどんなものかっていうのをもう少し分析した方が、より実りが大きかった気がします。

もうひとつ。一般大衆向けに発行していたのであれば発行部数がとても大切と思います。それが少なかったら、やはり自己満足的なもので、40 年も続いているので恐らく発行部数は一定だったとは思いますが、それの分析もあるとより良かったと思います。

回答

はい、ありがとうございました。

討議［　横山教授　］

新住宅の特性とか建築ジャーナリズムの相違点とかはよくズームアップされているとは思いますが、こういう真面目な雑誌というのは本来続くべきだと思います。この研究の主旨とは違うかもしれないけど、それが廃刊にいたった原因とか、こういった雑誌をこれからまた続けていけるのかという、この研究を通してあなたが得た知見というものを披露していただけますか。

回答

廃刊になった理由は、小林自身はマンション建設がブームになって新住宅の指命を果たしたということで休刊にするということを述べていますが、自分の見解としては、ある程度実際に戸建住宅が普及した段階で、これ以上啓蒙することがなくなったということに廃刊の理由のひとつがあるのではないかと思っています。

討議［　横山教授　］

さっきの発行部数の話もあるけど、こういった真面目な雑誌って、例えば『カーサ〇〇』とか、あの手のやつにとって変わられるっていうのは、ある種のポピュリズムみたいなものが影響してるのじゃないかといった気がするのですけどね、それは違うの。

討議［　倉方准教授　］

ちょっといいですか。考えたみたいなのに上手く答えられていないから。見ていくとおもしろい、まあおもしろいというと変だけど、やっぱり焼け野原の時は都市にまで全て選択という可能性が無限にあって、やはりそれが段々と住宅はただの選択するものぐらいに縮小しているのですよね。最初はまあ無限の可能性があった。そのうち自分で設計を頼む時にどの人を選択するか、それが今度は最後の持家か借家か、マンションかみたいな、そういう選択の問題に段々と論点が矮小化していくと雑誌が啓蒙する意味がなくなってくる。真面目な雑誌だからこそ、戦後の住まいの我々の一般の選択が、段々とただの選択の問題になっていったということを真面目に映し出した雑誌なので、使命が段々と最後になくなっていったということです。またそういう意味では違う位相で『カーサ』みたいなものがでてくるっていう、戦後の意味があの時代で終わったんだなっていうことの象徴でもあるよね。

討議［　横山教授　］

こういう雑誌ってもう駄目なんですかね。真面目なことは重要だと思うんですけど。

回答

自分はまだ続いていてもいいと思います。また当時とは世間が求めている住宅像って言うものが移り変わっていると思うので、そういったところをきちんと捉えていけば可能性があると思います。

討議［　谷口准教授　］

　論考著者の推移でのその他の割合の話がありましたが、具体的にはどういう職種の方なんですか。

回答

　愛読者の方と思いますが、実際に自分が住宅を建てた際の経験談を述べるものや、作家や彫刻家のような方が住宅像のあり方について言及しているといった論考があります。